

僕はいつも彼女のことを思っています。兄弟たち、子供たち、友人のみんな、それに新婚の二人には特別によるしく。たぶん、マリヤが間もなくそちらへ伺うでしょう。僕は、自分があなたがた一同の一部であるとしても強く感じています。ですから、たとえ別れていなければならぬとしても、僕たちは何ごともしょに経験し、共に担い、お互いのためにつくしたり考えたりしているのだということを知っています。すべての愛と配慮と真心に対して、日々、また一刻一刻、あなたがたに感謝している

結婚式のための説教

獄中から送られたもの

四三年五月

「……わたしたちが、神の栄光をはめたたえる者となるためである」(エペソ一・一二)。

新郎新婦は、結婚の日を、比べることもできない勝利感をいだいて喜び祝う当然の権利を持っています。あらゆる困難・抵抗・支障・疑念・躊躇を——気にせずに関き流すというのではなく——それらと誠実に直面して克服した時——たとえ、何もかもそうなるのが当然だというわけではないとしても——それは確かによいことです——。その時二人は実際にその人生における決定的な勝利を得たのです。二人は、互いに対して言明した「誓いの」「然り」によって、自分たちの全生涯に、自由な決断において新しい転回を与えたのであります。すなわち、人生が二人の人間の永続的な結合に直面させるところの

あらゆる問題や気づかぬ事柄に対しても、喜ばしい確信をもって挑戦し、自分たちの行為と責任とによって自らの生活のための新しい土地を開拓したわけですから。こんなに大したことを人間はすることができ、また自分たちの人生のかじを手にして操縦するということ、はかり知れない自由と力とを与えられている。このことへの喜びが、どの結婚式に際しても少しは響いているはずですし、新郎新婦の幸せの中には、自分たちの幸せを鍛える鍛冶屋であることを許されているという、地上の子としての正当な誇りがいくらかはあるはずで、ここであまり性急に、しかも熱狂的に、神の意志とか導きとかについて語るのは、適当ではありません。何といっても、ここで働きかつその勝利を祝っているところの、徹頭徹尾人間的な二人の意志というものが単純にまざるわけであり、それは見逃されてはならないのです。あなたがたが歩んでいる道は、あくまで先ず自分たちで選んだ道です。あなたがたがこれまでしてきたこと、今していることは、さしあたりは先ず宗教的なことではない。むしろ全くこの世的なことです。ですから、あなたがたもまた、誰も引き受けることのできないそのための責任を、自分たちだけで負うのです。もっと正確に言えば、エバハルト、

君には、そういった責任が内に含んでいて、すべての幸福と共に、自分たちの計画をきちんとし遂げるという責任がすべて負わされています。そしてレナーテ、あなたは夫を助けてその責任を負い易くしてあげるのです。そこに、あなたがたは自らの幸を見出すでしょう。あなたがたが今日、これは自分たちの意志である、自分たちの愛である、自分たちの道である、と進んで言明しようとしなければ、それは誤った信仰に逃げこんでいることになるでしょう。「鉄と鋼は崩れるとも、とわにつきせじわれらの愛」。あなたがたが互いの中に求めようとしているこの世の幸せ、また——中世の歌の文句で言えば——精神においても肉体においても互いに相手の慰めとなることにおいて成り立つこの世の幸福への求めは、人々の前でも神の前でも正当な権利を持っています。

あなたがたは、——誰かがそうだとすれば——あなたがた二人こそは、自分たちのこれまでの生活を、比べることもできぬ感謝をもってふりかえるべきあらゆる理由を確かに持っています。全くあなたがたは、人生の喜びと美しさをこれまでも溢れるばかりに受けており、またすべてはあなたがたにとってうまく行き、あなたがたの回りは人々の愛と友情に囲まれている。あなたがたの道

は、たいていは、足を踏み入れる前に既に平坦にされてきました。どんな境遇にあっても、あなたがたは、家族や友人に守られていることを知ることができました。誰もがあなたがたに良いことだけを惜しみなく与えました。そして遂に、あなたがたは互いを見出すことを許され、そうして今日、自分たちの望んだ目標に導かれたのです。——あなたがたは、どんな人でもこのような人生を自力で作りに出したり取り去ったりはできない、それはある人には与えられ、ある人には拒まれていたものだということ、自分でも知っているでしょう。それこそ、私たちが神の導きと呼んでいるもののなのです。今日あなたがたの意志と歩みが目標に到達したことについて、あなたがたの喜びはそれだけ大きく、神の意志と道とがここまで導いて下さったことに對するあなたがたの感謝もそれだけ深いものがあるでしょう。こうしてあなたがたは今日、自分たちの行為に對する責任を、信頼に満ちてわが身に負うのです。また同じように信頼に満ちて今日、その責任を神の御手にゆだねてよいわけですし、事実、そうするだろうと思います。

あなたがたの然りに對して、今日、神が彼の然りを与えられる。また、神の意志があなたがたの意志を認めら

れる。さらに神はあなたがたに、勝利と懺悔と誇りを許し、そのような感情をたっぷりと懐かせて下さいますが、このことによって神は同時にあなたがたを、自分たちや人々に関わる彼の意志と計画の道具とされるのです。実際神は、とうてい理解できぬほどの謙虚さをもって、あなたがたの然りに對して彼の然りを言われます。しかし神は、そうすることによって同時に全く新しいものを創造される。すなわち、あなたがたの愛から聖なる婚姻を造り給います。

神は、あなたがたの結婚生活を導かれる。結婚生活は、あなたがた相互の愛以上のものです。それはもっと高い尊敬と力を持っています。というのは、それは神の聖なる定めであり、それによって神が人類を世の終りまで保持しようとしておられるからです。愛においてはあなたがたは、世界中に自分たち二人だけを見えています。結婚生活においてはあなたがたは種族の鎖の一環であって、それは神がご自身の栄光のために来たりせたり過ぎ去らせたり、また御国へと召したりなさるものです。あなたがたは、愛の中では自分たち二人の幸福の天国だけを見るのですけれども、しかし結婚生活によってあなたがたは責任的にこの世界の中に、そして人間の果たすべ

き責任の中に立たされているのです。あなたがたの愛は二人だけのものであり、個人的なものです。しかし、結婚生活は超個人的なものであり、一つの身分の責任、一つの職務の責任なのです。王冠が王を造るのであって支配しようとする意志が王を造るのではないように、互いの愛ではなく結婚生活が、あなたがたを神と人との前で一对の夫婦とするのです。あなたがたがまず互いに結婚指環を交換し、それからそれをもう一度牧師の手から受けるように、愛はあなたがたから来るが、結婚生活は上から、つまり神から来るのです。神が人間よりずっと高いように、結婚生活の神聖さと権利とその約束とは、愛の聖さや権利や約束よりもはるかに高いものです。あなたがたの愛が結婚生活を支えるのではない。今からは結婚があなたがたの愛を支えます。

神は、あなたがたの結婚を、解消不可能なものとし、また、「神が合わせられたものを、人は離してはならない」(マタイ一九・六)。神があなたがたを結婚生活の中で結び合わせられる。それをするのはあなたがたではなく、神です。あなたがたお互いの愛を、神と取り違えてはなりません。神があなたがたの結婚を解消不可能なものとし給うのです。あなたがたが外的・内的に直面するあら

ゆる危険から二人の結婚を守って下さるのは、神です。

神が、この結婚が解消不可能であることの保証になろうとしておられるのです。この世のどんな権力も勝惑も、人間のどんな弱さも、神が結び合わせられたものを解消することはできないということを知る者にとって、これは祝福に満ちた確信です。そうです、このことを知っている者は、安んじて「神の合わせられたものを、人は離すことができない」、と言うことを許されています。愛に常につきまとうすべての不安から解放されて、あなたがたは確信と全き信頼をもって互いにこう言うことが許されています。われわれはもはや決して互いに失われることはありません、神の意志によって、死ぬまでお互いのものだ、と。

神は、一つの秩序の基礎を置き、その中であなたがたが結婚生活をしながら共に生きることができるようにして下さいます。「妻たる者よ、夫に仕えなさい。それが、主にある者にふさわしいことである。夫たる者よ、妻を愛しなさい」(コロサイ三・一八、一九)。あなたがたは結婚によって一つの家の基礎を据えるのです。そのためにはある秩序が必要です。そしてこの秩序は非常に重要であり、それがなければすべてはバラバラになってしまう

ので、神ご自身がそれを定められるのです。あなたがたは自分たちの家を形成する際、あらゆる点で自由ですが、ただ一つの点で拘束されている、すなわち、妻は夫に従い、そして夫は妻を愛しなさい、ということですが。それによって神は、夫と妻にそれぞれ固有の名誉を与えられるのです。夫に仕えて彼の助け手となることが妻の誉れです——それは創造の物語(創世記二・二〇)に言われている通りです。——そして、妻を心から愛することが夫の名誉です。夫は、「父母を離れてその妻と結ばれ」(マタイ一九・五)るでしょう。また、「妻を自分の身体のように愛する」でしょう。夫の上に立って支配しようとする妻は、自分自身と自分の夫の不名誉となります。それはちょうど、夫が妻に対する不十分な愛によって自分自身と妻の不名誉になると同じことであって、両方とも、結婚生活の上にあるべき神の誉れをないがしろにするものです。妻が夫と同じようになることの中に名誉心を求めたり、夫が妻を自らの征服欲と放恣の玩具としか見ないような時代や関係は、不健全なのです。妻の奉仕が彼女の名誉の軽視、いや、その毀損と見られたり、妻に対する夫のひたすらな愛が軟弱さと愚劣さとして見られる時、それはすべての人間的生活秩序の解体と崩壊の始

まりなのです。

妻が神によって置かれた場所は、夫の家です。家が何を意味しうるかということは、今日、たいいていの人の場合忘れられています。しかし私たちにあってそれは、まさに私たちの時代の中でこそ特に、明らかになってきました。それは、この世界のただ中で、それ自体一つの国であり、時代の嵐の中にある城、逃れ場、いや聖所のようなものです。それは外的な、公けの生活の変転ただならぬ出来事といった動揺する基礎の上に立っているのではなく、神の中に憩うものです。ということはいつたり、家はそれ自体の意味と価値、それ自体の本質と権利、それ自体の使命と尊厳を神から受けているということですが、家とは、神がこの世界の中に基礎づけられたものであり、そこで——この世に何が起ころうとも——平安・静穏・愛・純潔・規律・畏敬・服従・伝統などが、そしてそれらすべての事の中に——幸福が宿るべき場所です。世の中でこのような世界を夫のために造り上げ、そこで働くことが妻の召命であり、幸福なのです。この妻の使命と課題がどれほど大きく豊かなものであるかを知るならば、彼女は幸せです。新しいものではなく存続するもの、変動するものではなく安定したもの、騒がしいことではな

く静かなこと、言葉ではなく業、命することではなく自ら獲得すること、欲することではなく持つこと——これらはすべて夫への愛によって生命を吹き入れられるのですが——これこそ妻の領分です。ソロモンの箴言にこうあります。「夫の心は彼女を信頼して、収益に欠けることはない。彼女は生きながらえている間、その夫に良いことをして、悪いことはしない。羊の毛や亜麻を求めて手ずから望みのように、それを仕上げる……。夜の明けぬうちに起きて、その家の者の食べ物を備え、その女たちに日用の分を与える。……手を負い者に開き、乏しい人に手をさしのべる。……力と気品とは彼女の着物である、そして後の日を笑っている。……『有能な女は多いが、あなたはすべてのにまさる』と」(箴言三二・一二以下)。正しい妻、あるいは聖書に言われているような「有能な」「賢い」妻の中に夫が見出す幸福は、聖書においては常にくり返し、地上の最高の幸福とたたえられています。「彼女は宝石よりもすぐれて貴い」(同三二・一〇)。「賢い妻はその夫の冠」(同一二・四)。しかし聖書は、同じようにあけつびろげに、意地の悪い・「愚かな」妻によって夫と全家とにもたらされる禍についても述べています。

さて、夫は妻のかしらと言ひ表わされ、しかも「キリストが教会のかしらであるように」(エペソ五・二三)という言葉がつけ加えられている場合、それによって私たちの地上の關係に神的照りかえしが射しているわけであり、私たちはそれを認め、敬意を払わなければなりません。ここで夫に与えられている尊敬は、彼の個人的な能力や天分の中にあるのではなく、結婚を通じて受けた職務の中にあるのです。妻は、夫がこのような尊敬をまもっているのだと見るべきです。しかし夫自身にとってこの尊敬は、最高度の責任のことです。夫はかしらとして、妻に対し、結婚生活に対し、また家に対して責任を負っています。さらに彼の上には、自分の家族のために心を配り、彼らを保護するという仕事のしかかります。彼は世間に対して自らの家を代表します。彼は家族の支えであり、慰めです。彼は訓戒し、罰し、助け、慰め、家を代表して神の前に立つ家長なのです。妻はこの職務を果たす夫を尊敬し、夫はこの職務を忠実に遂行する。これは神の秩序であるゆえに善であります。神の秩序をわきまえてそれを守る夫と妻は「賢く」、神の秩序の代りにそれとは別の、自分の意志と分別から生まれる秩序を立てることができるなどと考えている者は「愚か」

この席は、火と油を神に向かつて叫び求めるように導くべきもの、また神の国における彼らの永遠の使命を思い起こさせるべきものです。地上の交わりは永遠の交わりの始まりに過ぎず、地上の家は天の家の模倣であり、地上の家族は、神の前で子供であるところの全人類に対する神の父性の反映なのです。

神は、あなたがたの結婚生活の基礎としてあなたがたにキリストをプレゼントされます。「キリストもわたしたちを受け入れて下さったように、あなたがたも互に受け入れて、神の栄光をあらわすべきである」(ローマ一五・七)。一言で言えば、あなたがたの多くの罪が赦されている、その赦しの中でいっしょに生きなさい、ということです。それなしにはいかなる人間の交わりも、ましていかなる結婚も決して長続きするものではありません。互いに相手に対して権利を主張せず、互いに相手を批判したり載いたりせず、互いに相手を見くださず、決して相手に責任を押しつけず、あるがままに相手を受け入れて、日々、そして心の底から赦し合ひなさい。

あなたがたは、牧師の家の基礎を置くわけです。あなたがたの家からは、他の多くの家に向かって光と力が放射されるようであればなりません。牧師の家が自ら負

なのです。

神は結婚に祝福を、そしてまた重荷を与えられました。祝福とは、子孫の約束です。神は、常に継続する彼の創造の業に、人間をあずからせて下さいます。けれども、子供によって結婚を祝福されるのは、常に神ご自身です。「子供たちは神から賜わった嗣業」(詩一二七・三)です。そして私たちは、子供をそのようなものとして認めなければなりません。両親は、神から子供をいただくのです。そして再び神のもとに導かなければなりません。それ故に、両親は子供に対して神による權威をもつわけです。ルターは、神が両親に巻きつけた「金のくさり」の話をしていますし、第四戒を守ることが、聖書によれば、地上で長生きをするという特別な約束を持っています。しかし、人間はこの地上で生きているわけですから、その間神は、大地は罪の呪いの下にあって究極のものではないということ人間に思い起こさせられました。妻と夫の使命の上には神の怒りの言葉の暗い蔭がさしかかっていますし、また二人で負わなければならない神の重荷といふものがある。妻は苦しんで子を生み、夫は家族の者たちのために心を勞しつゝ、多くのいばらやあざみを刈る苦しみをなめ、額に汗して働かなければなりません。

うものは、ある特別な断念の生活です。その職務に属する多くのことを、夫はひとりで担わなければなりません。それは彼が職務を遂行するためですし、そしてこの職務は神のために誰にも言わずになされるからです。それだけにいっそう彼の妻への愛は大きくなければならず、またそれだけにいっそう、妻にも参与させてよいようなことには彼女が参与させなければなりません。——しかしそれだけにまた、牧師の妻は、夫が職務を担うその苦勞を軽くしてやり、彼のそばに立ち、彼の助け手となつてあげなければならぬでしょう。しかし、もし二人が自ら不断的折りと赦しの中にいるのでなければ、またもしどちらか一人が他の一人をキリスト者として生きるように助けることをしないならば、一体彼ら二人は過ちの多い人間として、どうやってキリストの教会の中で生き、自分たちの責任を果たすことができるでしょうか。ですからこの点で、正しい始まりと日々の修練が非常に重要になってくるのです。結婚生活の最初の日からその終りの日まで心にとめなければならぬことは、「互いに相手を受け入れて……神の栄光をあらわす」ということです。

このようにあなたがたは、二人の結婚についての神の

言葉を聞いたのです。神に感謝しなさい。神があなたがたをここまで導かれたことに對して、彼に感謝しなさい。神があなたがたの結婚生活の基礎を据え、これを固め、聖め、守って下さるように彼に願いなさい。そうすれば、あなたがたはその結婚生活の中で「神の栄光をほめたたえるもの」となるでしょう。アーメン。

ズザンネ・ドレスから

ダレム 四三年五月十五日

愛するディートリッヒ！ 八日ごとにそちらのテゲルのあなたのところに物を届けて、あなたが元気でいることを聞くと、いつも嬉しく思います。そしてほとんどあなたに会ったような感じがするのよ。外的に離れてはいてもそれが内的なつながりにはほんの少ししか影響しないということ、私たちはくり返し感謝をもって自覚していますけれど、その場合でも、空間的な近さはやはりとてもありがたいわ。さて、今日私たちはレナーテの結婚を祝いました。ウルセルとリューディガーの結婚式からの二十年は、あつと言つ間に過ぎました。ティエネは今ではあの頃の私と同じ年ごろです。花嫁につき添った少女たちは、ですから本当に年若でした。ミヒャエルとコルネリエがもすそをかがけ、アンドレアスとヴァルターが花を撒いたのよ。エバハルトの三人の兄妹たちはみんな出席したし、ハンス・ヴァルターも休暇を取りました……。

窓ガラスと壁は元通りになりました。あとは左官屋さ

んが来なければならぬだけです。この前の中絶は、ここではとても平穩でした。ただとても早く始まったの。私が子供たちを下へ連れて行くまでには、一番ひどい銃撃はもう終わっていました……。

心からの挨拶を送ります。

あなたの スーゼより

(1) クリスティーン・シュライヒャーのこと。

(2) ミヒャエル、および、アンドレアス・ドレス、コルネリエとヴァルター・ボン・ヘッファー。後者は、ベルリンのルフト・ハンザ航空の顧問弁護士であった法学博士クラウス・ボン・ヘッファーとエンミ(旧姓・デルブリュック)の子供たちである。

カール・フリードリッヒから

ライプツィヒ 四三年五月三十日

愛するディートリッヒ！

一週間前の今日、所用で行っていたハンブルクからの旅の途中、ベルリンに寄ったよ。ちょうど君の婚約者がその母親といっしょにこの日のために両親のところへ来

ると言つて来たといふことで、それを僕は特に嬉しく思った。こうして、思っていたよりも早く彼女を識ることになったわけだ。家では彼女は今、君がそばにいないのによく知られた存在となつてゐるが、これは君にとってはとても奇妙な感じがするに違いない。全く、いささかおかしい時代なのだ。彼女はわれわれ一同の氣に入つたよ。このことは君も想像できるだろう。彼女はハノーファーでの自分の仕事について、いろいろ話してくれた。一見したところ、彼女も、一番面倒で苦勞の多い奉仕に至る所で探し出し、自分のことはおよそ何一つ構わないような人々の一人らしいね。その場合もそれを当然のことのように言い、しかもつつましい態度で、このことは僕に大きな印象を与えた。彼女は君のために、自分の一週間のバターを食べずに取つて置いたそうさ。それに、ある女性の患者さんから贈られたコーヒー豆を自分の夜勤のために取つて置くこともしなかったというから、僕は彼女をきつく叱つておいたよ。僕はその時、君の名において行動したと思つてゐる。彼女のお母さんも、見たところ、特別な婦人のようだね。僕は彼女たちを送つて町の中をちょっといっしょに歩き、その間、双方の家族について少し話し合つた。いづれにしても僕は、君が将